

国頭村立国頭中学校校内学年研修会

(1) 単元名： 日記を書こう

(2) 本時の目標： 過去文型に気を付けながら、自分の出来事を英文で日記を書くことができる。

国頭中学校。「学びの共同体」の理念における学校改革に旗をあげ5年目となる。改革当初の神元校長も異動になり、去年度から新たな校長にタスキが引き継がれ国中丸の航海の舵を取っている。

授業者のN先生は、改革当初に初任者として赴任してきて今年度で4年目となる。校内で誰よりも多くの同僚の「学び合う」授業を見てきた、またさらに多くの同僚に授業を開いてきた。

学校改革に完成はない、常に流動する「人」の事情を抱え、さまざまな困難を乗り越えなければならない。N先生の4年の経験で積み重ねてきた経験値の質は明らかに高い、「学び合う」授業の良さや困難も経験してきた。今彼女の獲得した経験が、新しい同僚たちに還元されこれもまた引き継がれる。人と人が「つながる」、教師としての専門性を高めるための授業研究でつながる。素敵な教師集団の関係が国頭中学校というパブリックな場所で実現できることに感謝の念が尽きない。



[授業導入]：前時の学習の振り返り ⇒ ALTが進める。授業者が補助する。



ALTとの呼吸が大切になってくる。両者の磨かれた意思の疎通が目線（アイコンタクト）で通ずる。授業者の余計な話もなく、チャイムとともに淡々と授業がはじめられた。生徒の目線が授業者の言葉に集中する「聴いて」とか「こっち見て」などの余計な指示は一切ない、ないのではなく必要ないが正しいのかもしれない。生徒は安心しきった柔らかな表情で授業者に目を向ける。生徒から信頼を向けられ期待される授業者、これに応えようと授業者も懸命になる。生徒と教師が互いに支え合って授業の成立と深まりを探究する。支え合う媒体は両者の「目線」と「きき合う」である。なぜ、この授業者の言葉はすんなり生徒の心に届くのだろう。国頭中の先生方で研究の話題として取り上げ解明しモデリングしてほしい。生まれ持った単なるセンスだけでもない、彼女の日常の学校生活や教室経営、授業経営のための工夫やアイデア、彼女の日常のエネルギーの燃焼がどこにどのように向けられているのか？彼女の苦勞を支えるあるいは癒しているエキスはなんだろう。わたし達教師が学べるネタが彼女から多く示唆されている。

[ペアによる活動] 授業開始から3分弱、ペアが互いに向き合って音読の活動を仕組む



写真①、カードを使って読み合う。3分以内に下ろされたことがまず画期的。しかもペアによる活動なのでかわりが必然となる。うれしいことはどの生徒も実に楽しそうに「読み合っている」事実である。一人も排除されず、ニヒリズムな態度がみられない。写真②、単語カードを読み合う。女の子は9月からの転入生である。すっかりこの教室の空気に溶け



込んでいる。男女のペアで交互に読み合う、柔らかな素敵な表情が見ている者を安心させる。この授業の風景を成立させ「安心」を獲得するのにどれほどのエネルギーを費やしたことだろう。

[教師の日記を訳する] ⇒ 自分の日記を書く前に、授業者は、お正月の自分の出来事を書いた英文の日記を提示しグループで訳するように指示した。本課題に入る前の足場づくりである。まずは先生の出来事が何だったか当ててみて、実に柔らかい表情で課題が下りていく、生徒たちにも自然に受け入れる。



どのグループを見ても写真の通り、だれ一人孤立させない、授業者はグループ活動中はケアに徹して生徒を見守っている、優しさへのポリシーまで感じる。

[共有する] 左下の写真、グループで訳した内容をみんなで確認する。(共有)



学習形態を、ここで一度コの字型にもどし全体できき合うスタイルに構える。学びのリセットでもある。ここまでは、本時の本課題(ジャンプ課題)を解決するための足場づくりと考えてよい、時間をかけずあっさりグループでの話や躰きを整理し、ジャンプ課題へとつなぎたいところである。授業者は終始笑顔で各グループの言葉に視線をあずける。生徒も実に自然な口調で話す、形式的な発表や話し合い質問に対して生徒が答え、教師に評価してもらう(IRE (x-H))ではなく、対話的コミュニケーションである。



生徒の表情が抜群にいい授業者の笑顔がそのまま生徒の表情に映し出されている。できていなかった生徒、わからない生徒も、ふてくされる様子は全くうかがえない。



[ジャンプ課題] 自分の出来事を日記にする。

本時のメインステージである。コの字型から再度グループにして「自分の出来事を英文で日記に書く」。課題が明確で、やり方は先ほどの共有で確認されている。訊くもよし、調べるもよし、「分からないければ友達に訊く」「困っている仲間は助けてあげて」支え合う仲間の言葉が教室をいきかう。みんなが貪欲に自分の日記の完成に向かう。



下写真、周囲からヒントを探す生徒である。



[優しく困らせる]

グループ活動を見守る教師に生徒は質問を投げる。しかし授業者はそのままグループの仲間につなぎ立ち去る。この行為が観察中何度も見られた。質問者は仲間に依存しなければならない状況になる。⇒「優しく困らせる」



[淡々と完成に向けて探究が進む]

素晴らしい授業風景、各々違う出来事を英文に書き綴っていく。調べる、訊く、書く。仲間が困ったら手が差し伸べられる。生徒の表情も、夢中になった引きしまった顔になるが、対話の表情は頬が緩む。教師と生徒、生徒と生徒の素敵な関係を見せつけられた。



[授業の終末]

授業はチャイムが鳴ったので終わった。しかし、鉛筆を置く生徒が一人もいない。どうして?



[2枚の写真] ケアする。学びの共同体に机間巡視という言葉はない。生徒を監視するために歩くのではなく、困り感を持った生徒を仲間につなぎケアすることが目的である。



教師が直接支援するのではなくできるだけ仲間につなぎ生徒の中に互恵的関係をつくってあげたい。

授業者の手を見てほしい、優しく手のひらでふれ後押ししてくれている「大丈夫よ、聴いてみて:」授業者の声が聴こえる。



N先生、ありがとうございました。素敵な子ども達の関係が観ることができてほんとに安心しました。学びの共同体は「関係づくりである。」佐藤先生の言葉があります。関係がつながりをつくり、安心と信頼を築き生徒一人ひとりにとって、なくてはならない学校の存在が意味づけられるのです。

村内 7 つの小学校から様々な個性を持った子ども達が国頭中学校に集約される。村教育委員会はこの国頭中学校をパイロットスクールに指定し、小学校からの取り組みを中学校で熟成させたい思いがある。国頭中学校の先生方に期待が高まる。地域の唯一の中学校である、プレッシャーとして受けるのではなく保護者や地域とともに生徒たちの幸福を追求してほしい。本日は素敵な授業ありがとうございます。

